

私はいつも空想にふけているのね
だからとりとめのないことで
みんな絵ができていますよ
自然のものでそれが朽ち果てていくようなものを
じっと見るのが大好きで
絵ってというのは
自分の描きたいものを描くのが絵で
自分で身近に触れるものの中から
触発されて描くものだと思っている
ものの持っている形というのが
ひとつの力を持っていないといけない
内側でその形が外へ弾けるぐらいの
強さを持っていないと
やっぱり、それはものとして出てこない
絵描きというのは自分の作品の前に立つと
とても照れくさいんです、なんか。
自分が丸裸になっていて、その前にこれは私の裸です、
というような。
これはフランス時代からの絵で、
私がフランスに行ったのは31歳の時だったんです。
そして、たまたまその頃、
加藤周一という人が新聞に連載をやってて、
その挿絵を僕がやることになったもんだから、
加藤さんに、色々パリの事情なんかを聞いていたら、
美術館を見てまわるとか、地方をずっと見てまわるとか、
絵は描かない方がいいよという。
十分にそれを見たという確信になったら、
1年のうちから少しずつ絵を描き始めたらよろしかろうと。
だから、とにかく1年間は描かないで
美術館をまわったりとか、色々やりました。
で、ようやく1年経ったときに解禁にして、
日本から絵の具を随分持ってきてたんです。

で、いざ描こうとなって、その絵の具の箱を開けましたら、
僕の使う色がひとつもない。
で、僕は自分が使わない色をなんで持ってきたのか、
これは不思議でしょうがなかった。
だから、僕が日本にいる時にどんな色で
描いてたかというのは、
たった1年の間にすっかり忘れてしまったんです。
だから、今、これはもう
フランスの時の絵ですけれども、
日本の時の絵が並んだら、
どうしてこの同一人物かと思えないぐらいに
色が変わっているんです。
で、当時、パリは汚いパリだった。
壁に100年200年の歴史が染み付いて
真っ黒い感じがして。
私は九州の炭鉱町で育ったんだけど
これは俺の故郷と同じだなとその時思った。
だからその暗い中でずっとやって1年経って
色がすっかり明るい色になったというのが、
私は自分で不思議でしょうがない。
そういう中で描いたんですけれども。
大体船で、私はマルセイユに着いて、
マルセイユから朝、汽車に乗ってパリに向かったんだけど、
その時、窓の外をひょいと見たら、
セザンヌのレスタック風景という
その風景がずっと広がってる。
その海とその向こうの岬と空というのは、
非常に透明にすっきりと浮かんでいる。
それを見た時に
僕もここに生まれてここに家を建てれば、
セザンヌと同じ絵が描けたんだ、と。
だから、セザンヌは恵まれているなと思ったんです。
こういう明るい中で描けば、
そのまま描けばいいんだなと。
それからパリでモデルを見た時に、

ピカソ恵まれてるなと思った。
僕は立体感の弱い女の像しか描いていないのに
向こうに行って裸を見たら
胸も厚いし、顔もギョロギョロとしてて、
ここで描いてあるピカソと同じ画が描けるんだ、
ピカソは恵まれているよなと思ってた。

その夏、オランダの方に旅行したんですけど、
夕暮れになると、皆さん
部屋が暗くなるもんだから、
椅子を外に出して外で新聞読んだりなんかしてる。
そうすると、暮れなずんだ上からの光に
ずっと動かないでいる人たちを見た時に
レンブラント光線という
レンブラントの上からの光で描いている、
何も感心することじゃない、
オランダ人はみんなレンブラントじゃないかと思ったり。
この絵はスペインで描いたんだけど、
丘陵がずっとなだらかな丘陵とか、
そのままずーっとはるかな平原が続くとか、
ごつごつした岩肌の土地が広がっていく。
夕暮れなんかになりますと、太陽が長く渡ってくると、
その丘陵を影が長く伸びていく。
僕はあれを見た時に
ドン・キホーテの物語を思い出して、
ドン・キホーテは、自分の影が丘陵に
ずーっと向こうの山まで影が続くのを見て、
敵が来たと思って走り回ったりするという。
これはやっぱりスペインの土地が
醸し出す雰囲気だから、
僕はようやくわかったのは、
なにも日本人が
向こうの真似をしたって、これはまるでつまらないんだと
つまり、そういうそこに行くとそのままの姿である
うん、そこでおのずからそういうものが浮かぶという、

ただひとつ、私が向こうで憧れたのは、
向こうの人は感覚的に立体感というものがある。
あらゆる動作とか、あらゆる感覚の中に
いつも立体で入っている。
僕らはいつも平面で物を考える。
私、芸大で教師をやったことがあるけれども、
一人ずつ3メートルだよ、とか、4メートルだよという
区切りをつけて、
そうすると、学生たちはここまでが自分の壁だと思って、
そこで絵を描いている。
そしたら、1人留学生がやって来て、
これはトラブルになって、教科室にその留学生と
日本の学生がやって来て、
つまり、その留学生は、じゃあ、あの平面は
どこまでが自分の領域かと
壁だけでこっちの面までの領域というものを
僕は頭に入れていなかったんです。
それから、『切腹』という映画がパリにいるときに
やってきまして、
僕らは切腹する時、横にこうお腹を切る。
これ切腹なんです。
向こうの人は切腹というのは
縦に切るものだと思っていた。
だから、その場面が非常に異様だった。
手に持っていきなり
手前の方へグサグサと切っていくんだけど、
日本人は台の上に置いてガチャガチャガチャッとやるから
立体に対する考え方がまるっきり違うんです。
日本の場合はただ広がっていけばいい。
日本画ってというのはどこが平面で道で、どこが空かということはない。
あるそのひとつの空間の中に置かれているけれども、
ヨーロッパ人の絵というのはそうはいかない。
で、私はせっかくやってきたんだから
そうはいかないところを何とかやりたいなと思って。
これは、私はパリの郊外に住んでいまして、
丘陵の中腹にアトリエがあったから、

そうすると、向こうの丘陵はまたずっと
いったん下って向こう側の丘陵までいっぱい並ぶんですね。
私はその上下でずっと延々と続いている風景をいつも眺めてて、
そうすると何となく丘陵に人が座ったら
面白かろうというような、そういう幻想で描いたんですけど。
私はしょっちゅう空想にふける男で、
これは、小学校の時からそうなんですけれども。
授業中でも窓の外を見ては
何となく色んな空想をして、
それで急に僕は名指された時に
何が何だか分からないというのはしょっちゅうありまして。
つまり、立派な造形としてこういうものを想像したというんじゃなくて、
とりとめのないことでみんな絵ができています。
この絵もそうですけど、丘に日が落ちるところを
いつもこうやって夕方眺めてた。
その丘陵だけが人間みたいに見えたり、色々描きました。
だから、私のパリ時代の絵は
丘陵を素材にしたような絵が多いんです。
もう私はこの風景だけの中で生きていたような感じなんです。
この僕の後ろにあるのは、
これは日本に帰って、私は玄界灘のところに
仕事場を持っていて、夏はそこで仕事をするんです。
そこはしょっちゅう台風が来る。
ある夏、瞬間風速 50 メートルという最大の恐ろしい台風だということだった。
アルミサッシの窓はたわわになって
雨がじゃんじゃん入ってくるんです。
で、バルコニーに大きな壺を置いてたんです。
これに描いてある。
これぐらいの壺なんですけども、
もう部屋中が雨だらけみたいなたわわになってきたときに
その壺はどうなってるんだろうかと思って、
上からひょいと覗いてみましたらば、
その壺はゆっくりと動き始めた、倒れないで。
だから、これは一体これは何なんだろうと思って、
下へ降りて行って、そうしたら、
それがゆっくりと僕の方へ向かって、

ゆっくりと近づいてくる。
で、もうすごい嵐なんですね。
そうしましたら、ずーっと手前まで来て、すぐ
ドアの近くまで来たかと、
そのピタリと横で止まりまして、今度はあの嵐の雨が
絵巻物のカエルみたいに幾重もの筋になって、
そのバルコニーの中ですごい波が
波状のやつがギリギリ回っている。
で、それが最後はどうなるかと思っていましたら、
一瞬にしてこの壺が消えたんです。
つまり、木端微塵になって散り散りになって、
小さい破片になって上からわーっと落ちてきた。
だから目の前のある物が現にある物がなくなったという
この不思議さが私は忘れられなくて。
とても私の所の景色はいいんですけれども、
実は、悪魔が中において、それが美しく、
僕らにあのような自然を見せてるだけだけど、
本当はその正体というものはこれぐらい
何ともしがたい恐ろしいものだというのが、
それから身に染みたんです。
それからというものは、あの本当にあの美しいものは
恐ろしいものなんだという
恐ろしいから怖いんだというのを実感しまして。

例えば、ゴヤが描いたマハの像というのなんか
とても美しい女の裸がある。
だけど、そのゴヤという人の晩年は、
とても恐ろしい絵を描いてる、もう
得体の知れないなんだかお化けを描いたり、
それから、戦争では人間の肉体をそのままぶら下げたり。
だから、あんな恐ろしいものを描く人が描いた時の
女の美しさってのは異常なものだと思って。
ゴヤでもピカソも晩年になってきまして、
恐ろしい絵を描いてる。
私もだいたい歳が彼らに近づいてきたから、

これからは恐ろしい絵を描かなきゃいけないじゃないかと。
だけど、恐ろしい絵というのは、心がけて描いても、
これは恐ろしくならないんですね。
まだこんな絵ですから、のんびりしておりますて、
恐ろしい絵にはなかなか到達しない。
私は自然のもので、それが朽ち果てていくようなのを
じっと見るのが大好きで、
自然から出てきたものはどのように動くか、
散らして、どのようにまた集めても
何となくひとつの緊密な美しさを持っているので、
これは枯れた葉っぱなんだか
そういうのを拾い集めて、
あのアトリエでいっぱい積み重ねて
それを描いたやつなんです。
これは山の断片なんです、
大分県に石灰を採る山がありまして、
上から上からスライスしていくわけで、
土の層になっているんですね。
ずっと私はこういう自然の、何か虐待されながら、
また自分の自然を取り戻そうとして、しかも
それがさらされながら歳月に耐えていかなきゃならぬという
その時にまた自然の側へ還っていくような
何かそういうものが好きで。
大体私は自分が炭鉱育ちなものですから、
そこには普通の自然はなかった。
私は、だから子供の時から、絵本を見ても
都会の様子が描いてあったり、
田舎の様子が描いてあったりするのを見て、
一体、僕の生まれた所は、どうして
絵本にならないんだろうと、
不思議に思ってたんです。
つまり、非常に人工的な地底を掘り出して
山になったのはぼた山といいますけど、
そうでないのは
それで地面をずっと上に積み重ねていきますから、

ハモニカ状に土地ができる。
そこへまた家を建てるものだから、
非常に人工的な、いわゆる
よくある戦争画である要塞みたいな
そういう地形になってるんですね。
それでももちろんそうなると、あまり樹が生えるとか、
花が咲くとか、そういうことはない
人間というものは、その生まれた土地が
かなり大きいんじゃないかと。
私はだから、やわらかい花だとか、それから貴婦人なんかを
描くという風には思わないんですね。
やっぱり泥まみれの女の人の方が貴婦人よりは
僕は絵にはしたい。
これは絵の問題で、
実際は人間としては別ですけども。
絵の上ではやっぱり汚い方が、非常に魅力がある。
私は、美術学校に入る時には、石膏デッサンが
試験になりますから、
石膏デッサンというものをまず勉強しなきゃならない。
この石膏デッサンというのは嫌で嫌でしようがなかった。
だから入った時に先生が
君はよく通りましたねって言ったんですけれども。
絵というのはもっと身近なもので、
自分で身近に触れるものの中から触発されて
描くものだと思っていた。
つまりね、石膏デッサンというのは、
西洋人の顔なんですね。
自分の親父だったり、奥さんだったりするような
そういう顔をずっと作った。
だから僕らが見た時は、
あれはまるっきり人間の顔として見ていないんですよ。
そして、そのまた作られた彫刻だから、クラシックな。
それを見て描けって言われてもね、
何の興味もないんですね。
絵っていうのは、自分の描きたいものを描くのが絵で、
いつでも描きたいものを描いてね、

もう油絵具を描きたかったら、最初から油絵具で描いたらいいと思う。
そうするとね、
自分のデッサン力がないということが
しみじみわかってくるわけです。
俺はこういう描きたいものを描く力はないけど、
それはどういうわけだろうというので、ものに則して
もう一回物を見るという、
その時に自分のデッサンの勉強だと思っているんですけども。
そのものの持っている形というのは、
一つの力を持っていないといけない。
例えば、この瓶なら瓶を描きましたという時に、
この瓶がひとつのここにあるという、
内側からみんなひとつで
内側が持っている力
それから今度はそれぞれのそれに向かって発散する
逆にいうと、周辺から目に見えない力が押し寄せてきて、
内側のものと
外側のものとの拮抗していくようなある力の、
それを勉強するのがデッサンじゃないかと
私は考えてるんです。
私ははっきりこれを描こうというあれがないんですね。
いつも頭の中で、どっか出掛けてて
空想癖があるから、
何となくぼんやりとこういうものを描こうというような
そういうことで取りかかるものだから、本当は題がないんです、
僕のは。
名前をつけるというのは、
それにふさわしいということはあるんですね。
私は暁（あかつき）に治めるとい
暁治（ぎょうじ）というんですけども、
親父はそのつもりで書いているだけで、
僕はとても朝寝坊で、夜更かしなんです。
それでお前は暁かと言われてもね。
これはやっぱり題はそのぐらいいい加減なもんじゃないかと。
展覧会で作品持って行ったら、明日までに題をつけてください
って言われるから、帰りに電車に乗って

アナウンスで電車が来ますから、白線までお下がりくださいって言うから
ああ、白線まで下がってっていうのをメモして。
ご順にお降りくださいって言うから
降りてから乗ってくださいって言うから、今度は俺の順番だ
あ、俺の順番ってね。
そうしていくと、電車を降りるまでに
10や20ぐらいすぐできるんです。
それでそれをまず書いておきまして、
断片をいっぱい置いて、目の前にずっと並べて、
これとどれが良いかといって当てはめていくんです。
ちゃんと決めてる時に
風が吹いて飛んだら、また違ってくるから
いい加減なの。
つまり、題名というのは非常に抜き差しならない
人もいると思いますけど、
僕のはいい加減だから
題を見て絵を見ないようにしてください。
中学の時の絵の先生が、日本画の先生だった。
で、1週間ばかり日本画を習った。
炭火で膠をトロトロトロ口溶かしましてね。
なんかやることもまどろっこいのね。だからね
これならやっぱり油絵の方がいいなと思ってね。
だから私はこういうのを描きたいという時、
思い付きだから、最初からそれが絵になるわけがない。
そうすると、しょっちゅうやり直しをやらなきゃならない。
でやり直しができるのは、
やっぱり油絵の具が一番できるんだね。
それで油絵をずっと描いていたんですけども、
今になってみるとね
どうも油絵というのは僕の性に合わないなというのは
分かってきた。
水墨画というんですかね、
あれが一番いいなというのが、
僕の中にあるんですね。
ただね、今度は水墨画の方の人に聞いたら、
墨がどうだの硯はどうだの、

で紙がどうで、ドーサ（礬水）引いてやったらこうなるの、ああなるのって、
ややこしいなというのでね。

怠け者だからそのまま油絵を描いている。

本当は誰かが手を取り、足を取り、先生、こういう効果を出したかったら、

これにこういう風に描きなさい、こうしなさい、って

教えてくれれば、そういう人がいたら

俺はすぐにでも転向したいと思っているんです。

情けない。私はいつも情けないんですよ、なんか。

必死になってやるということではなくて、

何となく仕方がないというような。

なんだなんとかシーンとしましたね。

もう申し訳ないなど。

いや、本当は

本当は必死になって描いているんですけど。

※テロップで表示される所蔵先は、収録当時のものです。当館所蔵品以外の作品に関しては、現在は所蔵
先が異なる場合がございます。